

1999（平成 11）年度 東京大学 入試問題 第 1 問（+120 字補問） 解答例

*あまりに古い問題ですので、今の東大受験生に役立つかどうか、掲載するのを躊躇します。そこで、あえて「補問」として（東大本来の意図とは明らかに違い安易ですが、最終センテンスに傍線部を付して）「身体空間は物体としての身体が占めるのと同じ空間を構成するわけではないのだ」について 120 字以内で「どういうことか」と問う補問を追加してみましょう。（120 字の記述練習以上の価値はありません。無視しても結構です。東大の出題者は、設問（四）と重複するので出題していませんからね。）

一 身体は、他の物質体とは異なり、通常、行為を支えているときは意識されず、行為を妨げるとき、障害物とすら意識されうるから。

*具体例「病氣」など、比喩「透明・厚み」などをそのまま用いないこと。「なじんでいたこの身体」が「よそよそしい異物」として迫ってくる理由は、「平常時に行為を支えているときは意識されない身体」が、「行為を押しとどめるときには、（立ちほだかる他者として）意識されてしまう」からである。極力本文中の表現を活かして書く。

*そもそも傍線部は「他の物質体とはあまりにも異質な現われ方をする」例であることを踏まえるのを忘れないように。なお、本文は筆者の現象学的身体論がベースにある。

二 身体は、人間が事物を自己のものとして意のままにするとき、自己が随意に使用しうる手段として機能しているという意味。

*「所有」＝「なにかをじぶんのものとして、意のままに（できる）」と、「媒体として働いている」＝「随意に使用しうる（道具・手段となる）」は解答に必須の内容。

*一般に人称代名詞「わたし・私」を解答表現に用いないこと。ここでは「自分・自己・自意識」などの意。

三 人称としての自己と身体と関係が、前者では乖離状態にあるのに対して、後者では特定個人の存在において区別ができない。

*ここは「（極端に可塑的な）人称としてのわたしと身体との関係」が、「わたしは身体をもつ」と「わたしは身体である」とではどのように異なっているかが問われているので、その大前提の理解を解答中で断っておくのが最低限の正答条件である。

*直前の「痛み」の具体例を一般化した内容（「だれかの身体」）と傍線部との関連が読み取れていることを示す解答を。

*「筆者の論旨にしたがって」とわざわざ断ってある。「わたしは身体をもつ」／「わたしは身体である」＝SVO/SVCだ、などという素朴な常識的先入観で誤読しないように、という注意である。「O＝客観」といった誤答に陥らないようにしたい。

四 身体空間は、物体としての身体の表面を限界とせず、人称としての自己と身体との極端に可塑的な関係に応じて伸縮するから。

*前問に引き続き、典型的な「常識的誤読」を誘発しやすい設問。だからここにも「筆者の論旨にしたがって」とあるのであろう。

*「気分によって伸縮する」というのが、誤読の典型である。客観的に（素直に）筆者の文章を読めば、「感覚の起こる場所が掌から杖の先まで伸びたのだ」ということが、「気分による伸縮」のはずはない。具体例の一つにすぎない「気分が縮こまっているときには、～身体的存在はぐっと収縮し」につられてしまい、陳腐な心理的解釈をしてしまわないように注意。（怪我で杖をついている人が、杖になれてきたからといって、ずっと気分が大きくなっているはずがないではないか！）。ここは「靴の裏面の感覚」の例などと同様、気分による拡大などではない。「人称としてのわたしと身体とが極端に可塑的な関係にある」から、そうした「伸縮」現象が生じるのである。無理に自分の論理枠（対比など）や先入観（読書経験など）に押し込めようとせず、筆者の表現に忠実に、普通に読めば、分かることである。

五 a 染 b 襲う c 埋没 d 自明

補問 身体は、他の物質体とは異質な現われ方をし、各個人にとって常に自己の身体である。この意味での人称としての自己と身体との関係は極端に可塑的であり、身体の限界は、皮膚に包まれた肉体表面ではなく、人称としての自己との関係に応じて変化するということ。（一二〇字）

*一二〇字問題の解答の構成・表現などが理解できれば、それでこの補問はもうよいでしょう。東大の出題者がこのように出題しなかった理由がよくわかります。ここまでの本物の入試問題の設問と解答内容がほとんど重複してしまいます。